

モノグラフ

中学生の世界

目次

vol.8

1981. 教育図書出版(株)福武書店 教育情報センター・調査室/加藤智穂・賀川雅子・雨宮紀子
東京学芸大学助教授 深谷和子・東京学芸大学大学院 横井富美子

女子中学生 —その心の傾斜—

調査を実施して	2
本報告書の要約	3
第I章 オリかけている女の子たち	
1. 調査目的	5
2. 子どもたちの自己像	7
3. 就職への構え	12
第II章 女子中学生たちの毎日	
1. 生活のリズム	16
2. その勉強ぶり	18
3. 友人とのつきあい	20
4. 制服について	22
第III章 女である部分をめぐって	
1. 性役割の受け入れ	26
2. ブルーディをめぐって	30
3. オシャレについて	31
第IV章 あこがれの未来・結婚	
1. こんな結婚を	36
2. こんなタイプの女の子に	41
まとめに代えて	44
調査票見本	48

調査を実施して

この調査レポート『女子中学生』でわれわれが明らかにしたかったのは、第I章のタイトルにもした「オリかけている女の子たち」のテーマである。

ここでいうオリるとは、職業的達成を断念すること、すなわち彼女たちがそれまでがんばってやってきた同級の男子たちとの、将来の社会的達成を旨とした競争から、撤退してしまうことを意味している。

ご承知のように、小学校の教育は、子どもたちの性別によって、教育の目標や内容を違えることを一切していない。中学や高校の教育も、一部を除いてほぼそれに近いと言えるだろう。こうして子どもたちは、性別にかかわらず、共通の理想や価値、また高い社会的、職業的達成を旨として勉学にはげむのである。

しかし、男子の子の場合と女の子の場合では、その後の成りゆきが、時に大きく変わってしまう。ある割合の女の子たちは、いつの時期からか、男子の子たちと大きく違った目標、違った達成を志すようになり、**精神的に、男子の子と肩を並べるのをやめてしまう**。自分の前にあるのは、社会的職業的達成ではなく、主婦であり母となることなのだ、と思いはじめた時から、学校や教師や、勉強の意味は、それまでと微妙にちがう色あいで、彼女たちの目に映るのではなかろうか。ガリ勉をして、男子の子たちの敵になるよりも、ちょっとドジでかわいい女の子になって、男子の子たちに支持される方がいい、という気持ちが生まれてくるのではなかろうか。

彼女たちのそうした心の傾斜をかいま見る気にさせられるのが、女子マンガの主人公たちのキャラクターである。いま女子中学生たちにモーレッツな勢いで読まれている、女子マンガ雑誌の女主人公たちは、申しあわせたように高一か高二の、彼

女たちより少し年上の女の子で、ちょっとツッパった感じの（実は内面は優しい）ヒーローに、片思いをしている。彼女はクラスや彼の周囲にいる（ライバルである）女の子たちにくらべると、成績もバツとせず、これと言った特技もなく、むしろちょっとドジっぽく、ある意味でイジけた女の子である。しかし他方から見ると、彼女は、実に人間的でカワイイ女の子でもあるのだ。その彼女が結局は、相手のヒーローと結ばれる（もっと美人ですぐれた能力のあるライバルの中で、ヒーローからえらばれる）といった設定である。

そうしたマンガが読まれるのは、むろんそれが彼女たちの理想と一致するからであろうが、逆にそうしたマンガのもつ教育力は、ある意味では、学校や家庭のもつ教育力の何倍も大きいのではなかろうか。

戦後の男女共学の歴史も30年を越えた今、中学生の半分を占める女子生徒たちの姿を、もう一度見なおしてみたいと考えたのが、このレポートである。

本調査の実施と刊行にあたっては、いつものように福武書店の全面的なご協力をえた。とくに福武書店社長・福武哲彦氏、福武教育情報センター・加藤智禧氏・賀川雅子氏・雨宮紀子氏など、関係者の方がたに、厚くお礼を申し上げたい。

また調査の実施にご協力いただいた多くの中学校の先生方と、中学生のみなさんにも、改めてお礼を申し上げたい。

昭和56年6月

東京学芸大学助教授 深谷 和子

東京学芸大学大学院 横井富美子

本報告書の要約

① 調査テーマ

現代の女子中学生たちは、形の上では同級の男の子たちと肩を並べながらも、気持ちの中ではすでに男の子たちとの競争からオリかかっている——つまり職業的自己実現を断念し、社会的達成をみざさなくなっているのではないか。これが本調査報告書のテーマである。

② 調査対象

調査対象は、東京・横浜・名古屋・千葉・茨城・栃木にある9つの中学校の、1・2年生、女子1,409名、男子577名、計1,986名である。昭和56年2月から3月にかけて、学校経由のアンケート調査が行われた。

③ 自己実現の意識が希薄な女子中学生

女子中学生たちは、全体に職業を通じての自己実現の意識が希薄である。一生何かの職業を持ち続けたい者はわずか22%。他は「結婚するまで」(47%)か、せいぜい「子どもが生まれるまで」(28%)で「やめたい」と考えており、専業主婦志向がきわめて濃厚である。(P.12 図2-①)

④ 「専業主婦」と結婚したい男子中学生

他方その受け皿としての男子中学生たちは、「専業主婦」と結婚したい者が実に71%、

「パートで勤める女性」が13%。「一生仕事を継続する女性」と結婚したいと考えている者は、わずか15%に過ぎない。

(P.12 図2-②)

⑤ 成績上位層に高い自己実現願望

女子中学生の、職業による自己実現を願う層は、成績上位群が42%であるのに対して下位群では21%と、半分である。すなわち成績のよい者ほど、職業的自己実現を強く願っている。(P.13 表7)

⑥ アイデンティティ確立の遅れた女子中学生

彼女たちは一般に職業とのかかわりで、自分がどんな適性を持ち、何に向いた人間かを把握できずにいる。すなわちアイデンティティの確立に、大きな遅れがあるようである。その中で比較的「向いていそうな職業や地位」としては、「保育や幼稚園の先生」54%、「ペット店などの経営」46%、「OL」44%、「専業主婦」45%であり、これらはいずれも、達成がそれほど困難でない(いわゆる専門的職業に属さない)と彼女たちに判断されている職業である。

(P.8 表3)

⑦ 男子生徒にもいえるアイデンティティ確立の遅れ

しかし自己の適性が、把握できないという状態は、男子の場合も似たようなものと

言えそうである。(P.9 表4)

⑧ 進学希望の低い女子中学生

このように職業的達成からオリかかっている女子中学生たちは、進学への希望も男子より大幅に低く、4年制大学を望む者は18%(男子42%)に過ぎない。(P.15 図4)

⑨ 環境に適応する女子中学生

にもかかわらず彼女たちは、むしろ男子よりよく勉強しており(P.18 図6)、教科の学習にもまあまあの意欲を示し(P.19 図8)、かつ学校のシステム(たとえば制服)にもよく適応している。(P.24 図11)

⑩ 「結婚」に大きな夢を抱く女子中学生

何と言っても、彼女たちの最大の夢と、予定された明確な将来像は、「結婚」である。現在1対1でつきあっている相手を持つ女子生徒はわずか7%だが、片思いの相手がいる者は46%。また、18%はそうした相手が欲しいと答えている。このように異性とのつきあいの欲求は、現在あまりみたされていないものの、かなり近い将来には(22歳までに52%、24歳までに90%)ぜひ結婚したいと思っており、かつその欲求は、成績の悪い者に強い傾向がある。(P.38 図20)

⑪ 「夫につくす」女性像をもつ女子中学生

彼女たちは結婚してから、ひたすら「夫につくす」女性像にあこがれており、たと

えば、「夫が遅いとき、夕食を食べずに起きて待っていたい」者65%(男子で望む者35%)「夫のためにセーターを編みたい」者62%(男子43%)「出勤のとき玄関まで見送りたい」者77%(男子52%)と、いずれも男子の期待を大きく上回る、献身の構えを持っている。(P.39 表37)

⑫ 家事手伝いをしない女子中学生

しかし結婚し、「つくし型」ワイフになることを夢めている割には、いまの家庭の中で、彼女たちは、家事の手伝い等に参加していない。(P.28 表22-①)

⑬ 男子に下位パートナーとして望まれたい女子中学生

男の子にモテる女の子のタイプとして、彼女たちの中にあるイメージは「あまり勉強ができ過ぎないこと、顔も美人よりカワイイ子で、マジメというよりやや調子のいい子」であり、男の子の敵(競争者)としてよりも、下位のパートナーとしての自己形成を願う気持ちが、中学生段階でかなり芽生え始めている傾向がある。(P.41・42・43 表39・40・41)

⑭ 今後の課題

このような女の子のオリズムとも言うべきメカニズムが、中学生という早い段階で現れつつあることに、われわれ教育にたずさわる側の人間として、何らかの対応が考えられなくてはならないだろう。



*写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません

■第I章 ■オリかけている女の子たち 〈女子中学生のアスピレーション、自己像をさぐる〉

1. 調査目的

オリズムと女の子たち

「おとなになったら何になりたい?」と聞いてみても、最近の子どもたちの口からは、あまりはっきりした答えが返って来ない。かつて日本が、やる気と抱負にみちた青年社会だった頃には、子どもたちもまた、野心と明確な将来像を、その胸に秘めていたにちがいない。しかし成熟に近づいたものの、やや年をとってしまった現代のわれわれの社会では、誰もがかつてほどの壮大なアスピレーション(大願・野心)を抱けなくなってしまっている。

子どもたちも例外ではない。中学や高校に入っても、何になりたいのか、何がしたいのかわからなくて、まごまごしている者たちが、われわれの周囲にたくさんいるようである。

しかしその困り方は、本来なら男の子より女の子たちに、一層大きいもののはずであろう。男の子は、本人のやる気は別として、とにかく何かにならなければならないのだし、身近にたくさんの男性の職業人を見ているので、職業的社会化に必要なモデルには、こと欠かない。

しかし女の子の場合はどうだろうか。彼女たちの身近にいるおとなの女性は、ほとんど

が主婦であり、またはせいぜい小学校の先生か看護婦ぐらいのものだろう。彼女たちが、「自分をあの像に似せて形づくりたい」とするモデルとして、女性の職業人は身近にはほとんど見当たらないのである。だから彼女たちのアスピレーションは、自然の成り行きとして、どこかで、同級の男の子と違って来るだろう。これは、男の子がパイロットを目ざし、女の子がスチュワーデスを目ざす、という形での方向の分化ではない。女子生徒たちが、あらゆる職業的達成からオリてしまって、主婦という、いわば無職の身分を目ざしはじめても、不思議はないのである。

このオリするという行為についてわれわれの周辺から二つのケースをあげてみよう。われわれの研究室に出入りしていた女子学生のうち、大学院を出て難関の公務員試験に合格したAさんは、3年間勤務した仕事をやめ、学生時代からの恋人と結婚して、ついこの間営業マンの夫の赴任先である東北に行ってしまったし、3年前に数学科を優秀な成績で卒業し、専門職員として大手企業の電算部門に入ったBさんも、商社マンとお見合いをして結婚し、今は静かに出産の日を待つだけである。

しかし、女性がこうした形でオリることがいけないなどと言うつもりはない。女性と男性のあり方がどのような姿をとるのが、本人にとってもその社会にとっても、オーバーに言えば人類全体にとって、ひとつの理想のあり方なのか。この大命題には、筆者たちの能力では今はとても答えられない。

しかし、ひとつだけ言えることは、幼い女の子たちが、または少女たちが、そろいもそろって、こうした職業的達成から早期にオリてしまって、ひたすらカワイイ主婦になることだけを夢みて暮らすとしたら、それは性別によって、教育の目標や内容や方法を違えること

をしていない、現在の公教育の意味を、基本的な部分でゆるがすものとも、言えるかもしれない。さて本章は、女子生徒たちのアスピレーションや自己像の問題に、こうした角度から接近してみようとするものである。

調査票の構成と サンプル

調査票の詳細は、巻末P.48～55に掲げたが、全体は次のような構成になっている。

- 1) アスピレーション 14 18-7 24
- 2) 日常生活 2 3 4 5 6 10 15 16 17
- 3) オシャレ 7 8 9
- 4) 結婚観 13 18 19 20 21
- 5) 性役割観 11 12 25

またサンプルは、東京、横浜、名古屋、千葉、茨城、栃木にある9つの中学校の女子1,409名と、比較のためとった4校の男子中学生577名、計1,986名であった。

調査の実施は昭和56年2月から3月にかけてで、時期的な問題から、中3を除かざるを得なかった。

(表1) サンプル数

(人)

学年	性別	
	女子	男子
1年	848	259
2年	561	318
計	1,409	577

2. 子どもたちの自己像

どの仕事にも 向いていない自分

人間はだれでも自分についてのイメージを持っている。身長や体重に始まって、親切だとか、数学ができるとか、スポーツが苦手など、その評価はきわめて多面的なものであろう。

その例が、表2である。

こうした部分的なイメージの積み重ねによって、子どもたちは、おとなになった時の自分の姿として、何がふさわしいか、何に向いていないか、などの判断をしているはずである。表3は、その結果である。女子と男子では一部違っているが、女子については、15の職業と3つの地位を提出して、「とても向いて

いる」から「全く向いていない」まで、4段階で反応させている。

全体として見ると、女子の場合「自分にぴったり」と答えられた職業の数はきわめて少なく、「喫茶店やペット店の経営者」が13%、「保母や幼稚園の先生」が12%で、あとは10%を割っている。「まあ向いている」を含めても、20%を越えるのは、上記の2つのほかに、「小学校の先生」「習いごとの先生」「OL」「デザイナー」「看護婦」ぐらいしかない。自分がどの職業にも向いている感じがしていないのは、アイデンティティの確立が不十分なことを示すものと言えるだろう。

と言って、彼女たちは専業主婦としての自分にも、あまり自信がなさそうである。「あまり」を含めて、専業主婦に向いていないと答える生徒が、半数を越えている。

(表2) 生徒たちの自己評価

		(%)				
		クラスで上位	中の上	中	ややできない方	かなりできない方
勉強	女子	6.9	17.7	40.3	23.9	11.2
	男子	10.3	24.5	32.3	23.0	9.9
		とても多い	かなり多い	ふつう	やや少ない	かなり少ない
友人数	女子	15.9	25.9	47.6	7.9	2.7
	男子	16.9	26.6	45.4	7.8	3.3
		とても得意	かなり得意	ふつう	わりと苦手	とても苦手
スポーツ	女子	9.1	19.0	41.5	20.8	9.6
	男子	16.7	20.9	43.7	13.7	5.0

(表3) どんな職業に向いていると思うか(女子)

(%)

	とても向いている	まあ向いている	あまり向いていない	全く向いていない
※政治家	1.1	3.9	15.1	80.0
	5.0		95.1	
大学教授	0.4	3.2	27.3	69.1
	3.6		96.4	
医者	1.4	6.0	23.9	68.7
	7.4		92.6	
校長先生(小・中学校の)	2.0	5.5	19.5	73.1
	7.5		92.6	
中学校の先生	2.1	10.8	40.9	46.2
	12.9		87.1	
スチューデント	1.8	12.2	33.3	52.7
	14.0		86.0	
小学校の先生	3.6	24.0	40.7	31.7
	27.6		72.4	
スポーツ選手	3.9	13.8	27.5	54.8
	17.7		82.3	
タレント	7.9	13.5	28.4	50.1
	21.4		78.5	
看護婦	5.6	22.7	32.4	39.3
	28.3		71.7	
デザイナー	4.3	19.5	35.6	40.6
	23.8		76.2	
ピアノ・書道・お花の先生	5.0	18.2	29.5	47.3
	23.2		76.8	
OL	6.7	37.3	33.4	22.6
	44.0		56.0	
喫茶店・ペット店などの経営	12.6	33.1	25.8	28.5
	45.7		54.3	
保母や幼稚園の先生	11.8	42.5	32.4	13.3
	54.3		45.7	
独身で仕事にうちこむ	6.6	13.9	28.6	50.9
	20.5		79.5	
商店などのおかみさん	5.1	16.6	33.0	45.3
	21.7		78.3	
専業主婦	12.7	32.0	27.5	27.7
	44.7		55.2	

※「政治家」から「保母・幼稚園の先生」まで15種の職業の並べ方の順序は、数量化第III類によって得られたI軸(高い達成—低い達成)の数値の大きい順とした。
 なお、数量化第III類で処理されたデータはI軸にしか反応を示さなかったので割愛した。

(表4) どんな職業に向いていると思うか(男子) (%)

	とても向いている	まあ向いている	あまり向いていない	全く向いていない
政治家	4.9 └── 10.7 ─┘	5.8	24.8 └── 89.3 ─┘	64.5
大学教授	2.8 └── 7.7 ─┘	4.9	27.6 └── 92.3 ─┘	64.7
医者	6.0 └── 15.9 ─┘	9.9	24.0 └── 84.1 ─┘	60.1
校長先生 (小・中学校の)	3.5 └── 11.6 ─┘	8.1	24.4 └── 88.4 ─┘	64.0
中学校の先生	4.0 └── 15.8 ─┘	11.8	32.9 └── 84.2 ─┘	51.3
小学校の先生	4.4 └── 19.9 ─┘	15.5	30.6 └── 80.1 ─┘	49.5
スポーツ選手	13.0 └── 35.0 ─┘	22.0	26.8 └── 65.0 ─┘	38.2
タレント	9.8 └── 18.9 ─┘	9.1	23.2 └── 81.1 ─┘	57.9
デザイナー	4.2 └── 16.9 ─┘	12.7	23.4 └── 83.1 ─┘	59.7
サラリーマン	7.7 └── 38.0 ─┘	30.3	26.2 └── 62.0 ─┘	35.8
喫茶店・ペット店 などの経営	10.3 └── 36.9 ─┘	26.6	24.7 └── 63.1 ─┘	38.4
保父や幼稚園 の先生	2.6 └── 15.6 ─┘	13.0	29.3 └── 84.4 ─┘	55.1
外交官	4.0 └── 14.4 ─┘	10.4	26.9 └── 85.6 ─┘	58.7
農業経営	6.5 └── 18.6 ─┘	12.1	23.0 └── 81.4 ─┘	58.4
大会社の社長	9.7 └── 19.4 ─┘	9.7	25.4 └── 80.6 ─┘	55.2
パイロット	6.7 └── 20.2 ─┘	13.5	28.9 └── 79.8 ─┘	50.9
警察官	5.8 └── 23.9 ─┘	18.1	32.7 └── 76.1 ─┘	43.4
独身で専門的な 仕事にうちこむ	12.5 └── 34.3 ─┘	21.8	21.7 └── 65.7 ─┘	44.0

男の子も同様

しかしこうした自己イメージのあいまいさは、女子に限ったものではないようである。表4に掲げたように、男子もまた、あいまいな自己イメージに苦しんでいる様子がわかる。

「まあ」も含めて同じく20%を越える割合で「向いている」と答えているのは、「小学校の先生」「警察官」「パイロット」「サラリーマン」「ペット店などの経営者」「スポーツ選手」でしかない。しかもこれらも、「向かない」が、6割から8割にも及んでいるのである。

(表5) どんな職業に就きたいか

(%)

	女子	男子
専門職	2.1	4.9
セミ専門職	5.1	7.6
教職	20.9	4.3
事務職	8.2	24.4
技能職	14.3	5.7
販売	1.9	1.6
自営	4.5	8.5
芸能・スポーツ	14.3	12.1
その他	4.8	8.1
未定	23.9	22.8

女生徒に人気の ある教職

次にこうした向き不向きをはなれて、将来つきたい職業をたずねてみよう。表5にその結果を掲げた。まず全体の24%は未定で、割合としては、どの職業よりも多い。しかしといて残り76%が、何らかのつきたい職業をもっているということではないだろう。なんとなく職業名を書いたものの、とくにふだんからそう思っていたわけではない者も含まれていると考えれば、実際の未定者はこれよりずっと多いとみてよいかもしれない。

さて、女子でいちばん人気のあるのは教職で、21%。これは教職がさきに述べた、職業的達成のための、いちばん身近なモデルであることによるものであろう。ただしこの内容

は、保母や幼稚園教諭が多くの比重を占め、小・中・高と、学校段階が上昇するにつれて希望者は大きく減少する。男子に比べると、専門職（セミ専門職を含む）の志望者も、事務職の志望者も低い。全体としては、生徒たちが、将来に対して、野心や夢を抱けなくなっている状況、とでも言う感じが伝わってくる数字である。

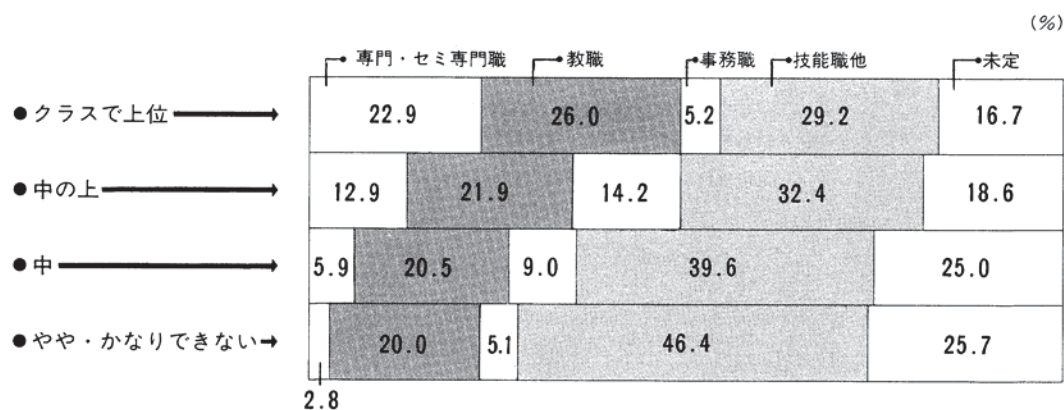
中学生という年齢は、子ども時代のように、ただ夢想的に自分の将来像を描く状態を過ぎ、現実的な調整へ踏み出す時期であろう。この時期、学校での競争は次第にきびしいものとなり、少年少女の頃の夢に代わる現実的な将来プランを見いだせないままにいる生徒たちの姿が、ここにあるようである。この迷いの多い時期に女生徒たちは、「オリる」という形で、自分の将来を設計し直すのかもしれない。

ちなみに、彼女たちの両親の職業を、表6

(表6) 父母の職業 (女子)

父 親		母 親	
サラリーマン・公務員・先生など	48.0	専業主婦	31.6
お店や工場をやっている	15.8	パートなどで働いている	23.5
工場やお店で働いている	12.0	毎日働きにしている	22.0
医者や弁護士などの専門職	2.4	家業を分担している	22.9
その他	21.8		

〈図1〉 成績×就きたい職業 (女子)



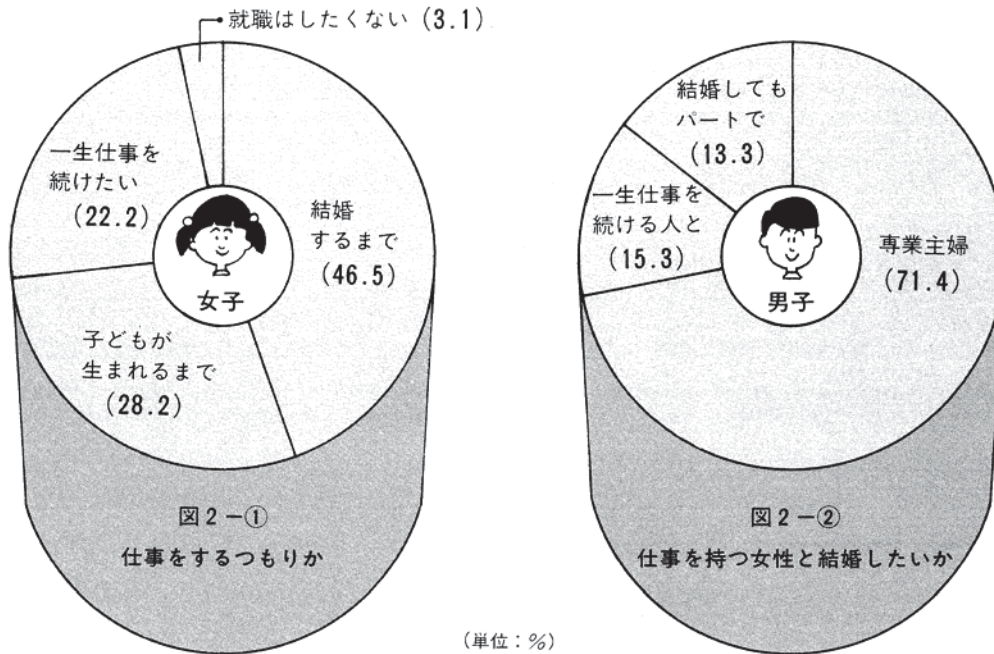
に掲げた。父親の職業は半分近くが、事務職と教員である。しかし女子生徒の場合、父親の職業は、直接には、自分の生き方に結びつかないであろう。母親の場合は、専業主婦が32%、パートで働いている者をあわせて55%が、いわゆる「家をまもる」という暮らし方をしている。

この、女性の先輩としての母親のあり方が、女子生徒の場合、どこかで「オリる」という

行為の背景になっていることは充分考えられよう。

なお成績との関連を見るために図1を掲げた。成績が悪い生徒ほど将来像が定まらない傾向がまず見いだされるし、成績のよい子は、かなりの割合で専門職と教職を旨とし(49%)、中位の生徒はOLで、下位の生徒は技能職といった傾向が見いだされる。

3. 就職への構え



75%は 腰かけ就職のつもり

以上のように、何か焦点が定まらず、将来に対するはっきりした展望をもたない女子生徒たちの姿が浮かび上がってきたところで、もう一步、彼女たちの職業意識へと踏み込んでみよう。

図2-①は、彼女たちに、一生何かの仕事をもち続けたいか、それとも時期はともかく、早晚仕事をやめて、家庭に入りたいかをたずねた結果である。

「全く就職をしたくない者」は3%とわずかで、残り97%は、近い将来仕事につくのを

当然と考えているが、ただし、「ずっと仕事を続けたい者」は22%にすぎず、75%は「結婚まで、または出産までの腰かけ就職」のつもりでしかない。

この22%の数字は、高校段階やまたそれ以後、更に減少するであろうし、また現実就職や結婚の時点では、さらに現実的な条件の下で、職にとどまりうる者の割合は減少すると考えられる。そうした行く末を考えると、女子生徒の4分の3が、すでに戦う意志を放棄しているというこの数字は、なんともわびしい気がする。せめて一度現実との戦いを交えた後に、戦意を放棄しても遅くはないのではないか、という気もしてくる。

またこうした意識と成績との相関をみたの

(表7) 成績×就職をするつもりか(女子)

(%)

	一生仕事を	子どもが 生まれるまで	結婚するまで	就職したくない
クラスで上位	41.5	24.5	31.9	2.1
中の上	30.1	24.0	43.9	2.0
中	17.0	28.2	50.8	4.0
ややかなりできない方	20.7	30.8	45.8	2.7

(表8) 進学×就職をするつもりか(女子)

(%)

	一生仕事を	子どもが 生まれるまで	結婚するまで	就職したくない
4年制大学まで	47.1	22.7	27.3	2.9
短大・専門学校まで	18.5	28.2	49.8	3.5
中・高まで	15.1	30.4	51.9	2.6

が、表7である。さすがに成績のよい層は、仕事の継続を願う者の割合が多いが、この層でも一生仕事を続けたい者は42%しかいない。

さてこうした女子生徒の希望の受け皿としての、男子生徒の構えはどうか。図2-②に掲げたように、実にみごとな受け皿が用意されている。妻に専業主婦を希望する男子生徒は71%、パートを含めると84%が、それを望んでいる。こうした男子生徒の意識が、同級の女子生徒たちを見る目や評価の尺度となって、はねかえってくることは充分考えられよう。これでは、オリずに戦っている女子中学生は、さぞつらいことであろう。

とにかく自分の手で 子育てを

以上のように女子生徒たちの間に腰かけ就職意識のひろがっている背景は、何なのだろうか。図3を見てみよう。仕事をもっている時に、子どもが生まれたらどうしたいかの問いに、彼女たちは、実に81%の圧倒的な割合で、「他人にあずけるより自分の手で育てたい」と答えている。「できれば親にあずけて、仕事を続けたい」と考える者さえわずか12%。保育所を考える者は7%と、さらに僅少である。また男子生徒たちも、これとビタリ合致した姿勢をもっていることに驚かされる。

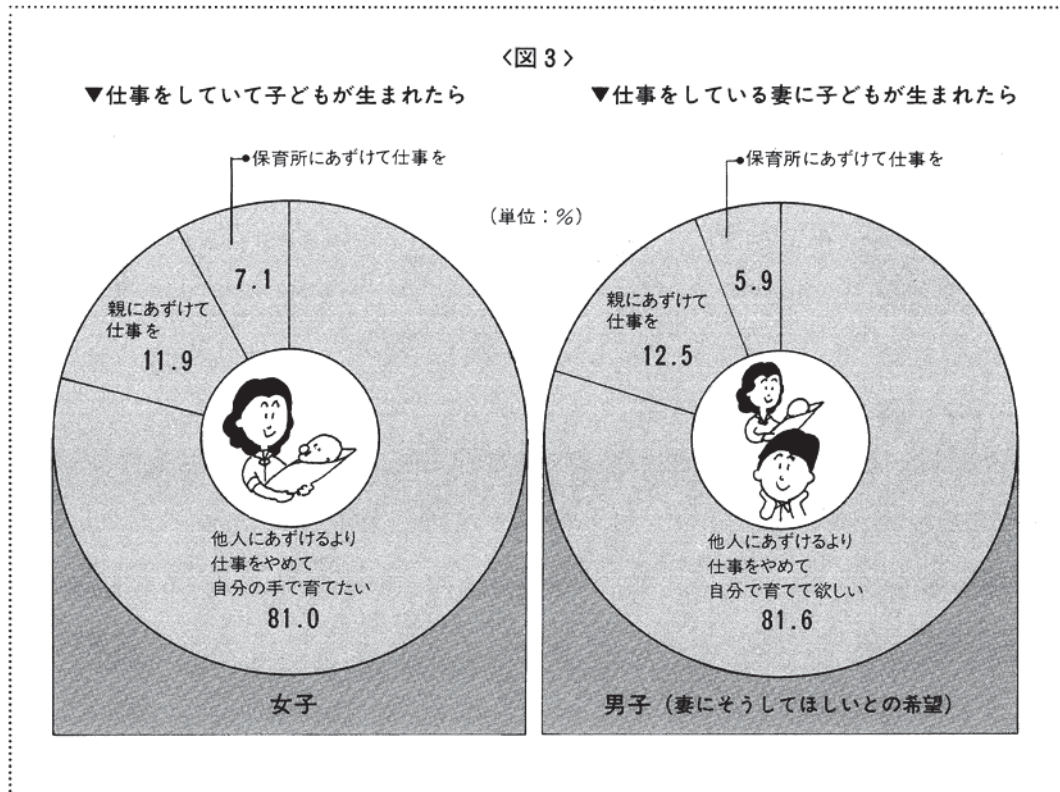


表9は、彼女たちの成績とのクロスである。この表は、成績レベルによって多少の差があると見るよりも、とにかく成績(ここには当然アスピレーションの差も含まれているであろう)のよし悪しにほとんど関わりなく、おしなべて、「子どもを自分の手で」という姿勢がある、とみるべきであろう。われわれにはどうも理解しがたい数字である。しかしわれわれのこの感想は、子育てという母親役割の否定から出たものではない。母親が、自分の手で子育てをすることは、むろん生物学的にも、心理学的にも、ひとつの理想の姿であろう。しかしそのことは一方で、女性というワクを離れた人間の生活、社会的生活(職業生活)の断念を意味することでもある。そうした将来

計画から彼女たちがこんなにも早期にオリてしまっているのか、という感慨を抱かずにはいられないのだ。

最後に、どの段階まで学校へ行きたいかを図4に掲げた。男子の42%が4年制大学進学を希望しているのに、女子は18%でしかなく、アスピレーションの差は大きい。このことは、成績と最も大きな相関が見いだされ、図5に掲げたように、成績上位群では大学進学希望者が60%にも達している。

(表9) 成績×子どもをあずけても仕事を続けるか (女子)

(%)

	他人にあずけるより 仕事をやめて育てたい	親にあずけて 仕事を続けたい	保育所にあずけて 仕事を続けたい
クラスで上位	72.6	13.7	13.7
中の上	77.2	16.7	6.1
中	85.8	8.6	5.6
やや・かなりできない方	79.7	12.3	8.0

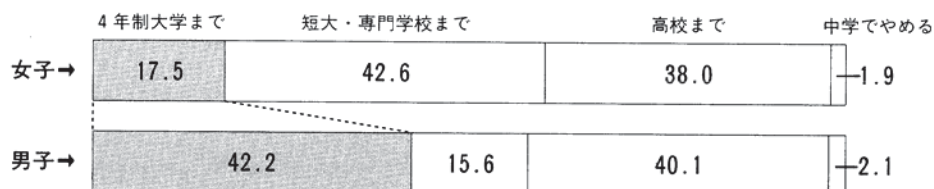
(表10) 進学×子どもをあずけても仕事を続けるか (女子)

(%)

	仕事をやめて 自分の手で	親にあずけて 仕事を続けたい	保育所にあずけて 仕事を続けたい
4年制大学まで	72.3	17.2	10.5
短大専門学校まで	82.6	11.3	6.1
中・高校まで	83.6	10.1	6.3

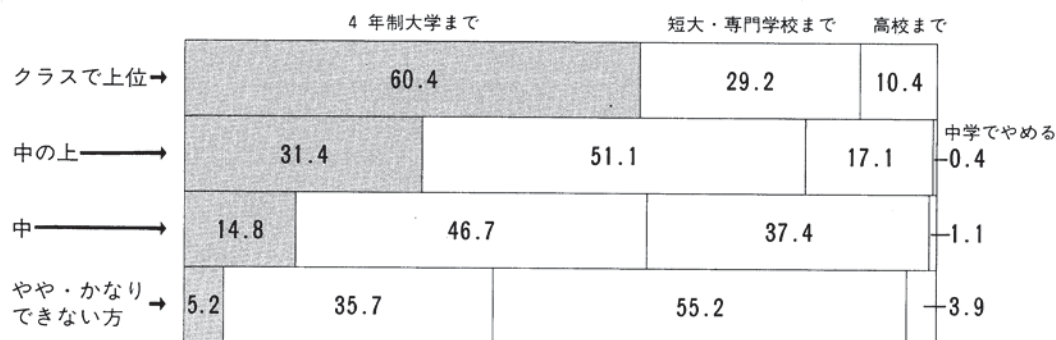
<図4> いつまで教育を受けたいか

(%)



<図5> 成績×教育期待 (女子)

(%)





※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません

■ 第Ⅱ章

■ 女子中学生たちの毎日

〈女子中学生の日常生活を追う〉

1. 生活のリズム

前章で扱ってきたアスピレーションの問題やオリズムのテーマは少しの間そのままにしておいて、この章では彼女たちの日常生活を追ってみよう。彼女たちは家庭と学校で、毎日どんなふうに暮らしているのだろうか。

朝ひとりで 起きる者は26%

表11は、彼女たちの起床ぶりを見たもので、生活習慣の確立や親への依存ぶりの一端が現れた数字とも言えるだろう。まず親をたよら

ずに起床している者はわりと少なく、女子生徒で26%、男子生徒で32%にすぎない。ほぼひとりで起きている者を含めても、女子生徒の41%でしかない。逆に毎朝起こしてもらう者が23%。しかも男子生徒とわずかながら差があって、女子の方が、自立の度が低い傾向も見いだされる。

また就寝時刻については、表12に掲げた。男子より女子の方が、やや就寝時刻が遅い傾向にある。12時以後に寝る生徒は思ったより少なく、女子で22%、男子で18%しかいない。

また表13は、睡眠時間で、6時間以内(10%)から9時間以上(5%)まで、バラツキが大

(表11) 朝の起き方 (%)

	女子	男子
毎朝ひとりで	25.9	32.4
わりとひとりで	15.4	17.3
半分半分	16.5	14.4
わりと起こしてもらう	19.0	17.0
毎朝起こしてもらう	23.2	18.9

(表12) 就寝時刻 (%)

	女子	男子
10:00 それ以前	10.2	17.0
10:30	19.5	22.3
11:00	27.8	27.8
11:30	20.9	14.6
12:00	11.9	8.7
12:30 以後	9.7	9.6

(表13) 睡眠時間 (%)

	女子	男子
6時間以内	9.6	7.7
6時間半	9.9	9.4
7時間	23.2	19.5
7時間半	19.8	17.9
8時間	23.1	28.0
8時間半	9.5	10.5
9時間以上	4.9	7.0

(表14) 朝食を毎朝食べたか(この一週間の間に) (%)

	毎朝食べた	少しぬいた	半分くらい	ほとんどぬいた	1日も食べなかった
女子	80.8	13.1	2.9	2.6	0.6
男子	78.9	8.7	4.4	5.7	2.3

(表15) 朝食の内容 (%)

	全然食べなかった	何かつまんだ程度	飲み物だけか	一応朝食をとった	朝食をしっかりと食べた
女子	0.9	6.1	38.0	55.0	
男子	2.6	6.7	34.9	55.8	

きい。またここでも男子生徒の方に、わずかながらよく寝ている者が多いようである。

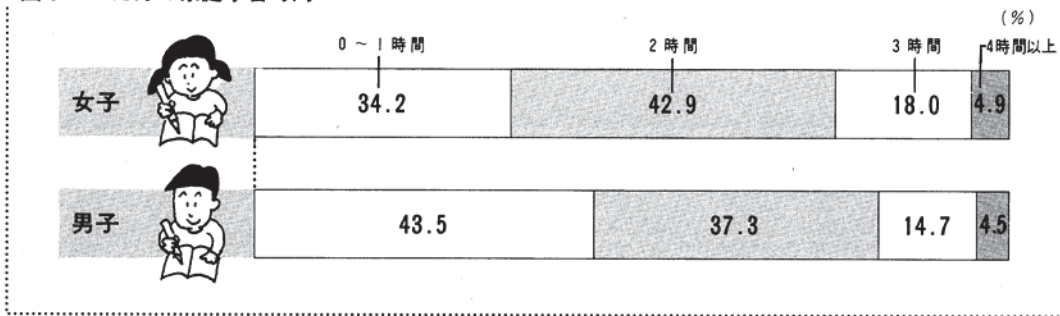
康的な家庭生活と旺盛な食欲の一端がうかがえる。

朝食を毎日しっかり 食べる者55%

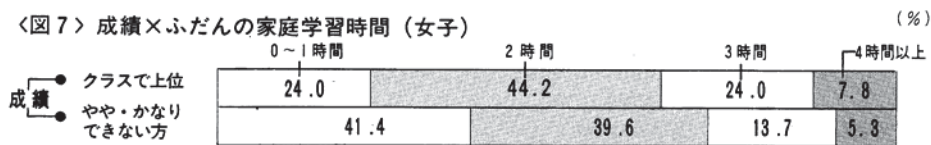
さて彼女たちは、毎朝どんな食事で、1日のスタートを切るのだろうか。表14に掲げたように、朝食ヌキの生徒は僅少で0.6%、ほとんどぬいた生徒を入れても、3%程度でしかない。軽食程度でも毎朝食べる生徒は81%にも達していて、世間で言われているよりも健

2. その勉強ぶり

〈図6〉 ふだんの家庭学習時間



〈図7〉 成績×ふだんの家庭学習時間（女子）



〈表16〉 試験勉強を何日前から始めるか

	0～3日前	4～6日前	7～9日前	10～12日前	13日前以上
女子	24.1	17.5	30.9	16.4	11.1
男子	23.4	15.2	25.0	21.3	15.1

男子より よく勉強する

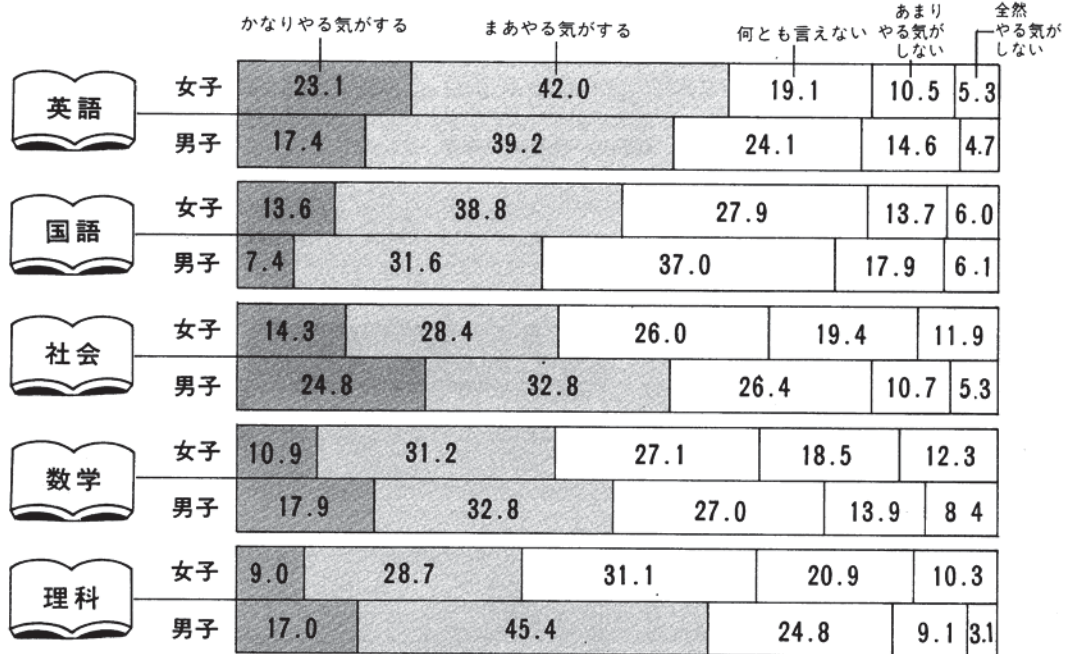
彼女たちは、帰宅後1日にどのぐらい勉強しているのだろうか。図6にそれを掲げた。彼女たちの家庭学習の最頻値は、1日2時間で、4時間以上の剛の者も5%ほどいる。男子は、やや少なめの傾向にあるが、ガリ勉派の割合は、女子とほぼ等しい。女子生徒のマジメさは、今も昔も変わらないものようであるが、社会的達成からオリかけていること

との関係は、どうなのだろうか。成績との関連は、やはりある。クラスで上位と下位の者のデータをぬき出してみたが(図7)、できない生徒の方に、勉強からオリてしまっている者の割合は多い。しかしここでもガリ勉派の割合は、両レベルに大差がない。

次に試験前の勉強ぶりを、表16に掲げた。10日以上前に準備する者は男子で36%、女子で28%と、多少の差がある。男子は、ふだんややなまけ気味で、イザという時に集中するタイプが多いとも言えるだろう。

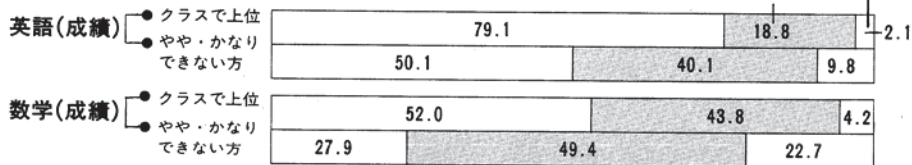
〈図8〉 勉強のやる気

(%)



〈図9〉 成績×勉強のやる気 (女子)

(%)



英語が好きで 理科がきらい

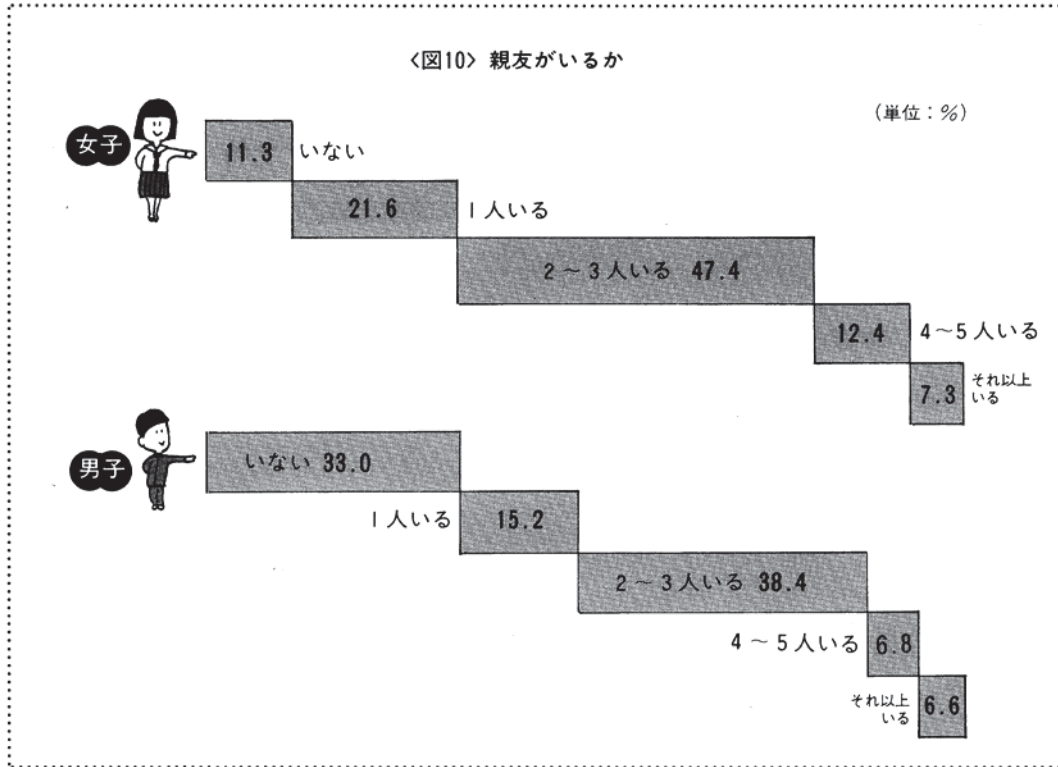
こうした家庭学習の姿とは別に、彼女たちはどのくらい、各教科に対する学習意欲を維持しているだろうか。図8は、主要5教科について、それぞれ「どのくらい、やる気がありますか」という表現を用いて、学習意欲または教科への興味・関心をみた結果である。教科の配列は、女子生徒のやる気の高い順に(段階値の平均)、並べてある。「まあ」も含めて

やる気がすると答えた者は、英語65%、国語53%、社会43%、数学42%、理科38%の順であり、国語と英語は男子のやる気をしのぐが、他の3教科では、10%以上男子の数字が高くなっている。

しかし全体に、「あまり」も含めて「やる気がしない」と答えた者の割合は、思ったより少ない。女子の場合、理科、数学、社会など、苦手な教科でも31%程度でしかなく、70%は、けっこう意欲の維持された状況が見いだされる。

なお成績との関連では、当然のことながら、よくできる者の方が、意欲的である(図9)。

3. 友人とのつきあい



勉強にあけくれる毎日の中で生徒たちが、学校生活の何が楽しくて何を生甲斐にしているのかを調査したデータでは、決まったように「友人とのつきあい」が、最上位に上がってくる。これを親友に限って見たのが、図10である。「親友がいない」と答えた者は、女子生徒の場合僅少で、11%(男子は33%)でしかない。

ボーイ・フレンドの いる者は7%

さて表17は、ボーイ・フレンドの有無である。図10の親友の有無とくらべると、数字には大きな差がある。

表が示すように、1対1でつきあっているボーイ・フレンドのいる女子生徒はわずか7%。予想外の少なさである。(ちなみに、男子生徒の方も、ガール・フレンドのいる者は、7%)『学園は花盛り、とくに中2はその時

(表17) 学年×ボーイフレンドの有無(女子) (%)

		いる	いない
ボーイフレンドの有無	1年	5.9	94.1
	2年	7.4	92.6
	全体	6.6	93.4

(表18) BFがないと答えた人は (%) つきあいたい人がいないと答えた人は (%)

		いる	いない			ほしい	ほしくない
つきあいたい 人がいるか	1年	48.4	51.6	つきあいたい 人が欲しいか	1年	34.5	65.5
	2年	51.7	48.3		2年	43.8	56.2
	全体	49.6	50.4		全体	37.8	62.2

(表19) 学年×ボーイフレンドの有無と意識 (%)

	BFがいる	BFはいないが つきあいたい人はいる	つきあいたい人は いないが欲しい	つきあいたい人 が欲しくない
1年	5.9	45.5	16.8	31.8
2年	7.4	47.9	19.6	25.5
全体	6.6	46.3	17.8	29.3

期』と言われるわりには、少ない数字である。

しかし「いない」と答えた生徒に「では、できたら1対1でつきあいたい人がいますか」とたずねると、今度は50%もの生徒が「いる」と答えている。意中の人はいても、ステディにまでは発展させられない、という片思いは、いつの時代にも多いものらしい。

さらに、「今は、つきあいたい相手がない」と答えた者に、「では、そういう相手がほしいですか」と追いうちをかけてみると、38%が「ほしい」と答えている。これは表18に示したように学年が進むと増加する傾向を見せる。

これを全体のパーセントになおすと表19、および下のようになる。

ステディのいる生徒	7%(7%)
片思いの相手のいる生徒	46%(32%)
相手のほしい生徒	18%(15%)
全く関心のない生徒	29%(46%)
(カッコ内男子)	

男子とくらべると、女子生徒の方がずっと異性とのつきあいに積極的な関心を抱いていることがわかる。このことが、後に述べる結婚願望や結婚への期待となって現れるのかもしれない。

4. 制服について

現在の日本の中学校教育のもつ問題点のひとつは、制服に代表される規則づくめの学校生活ではなかろうか。

いわゆる1960年代の学園紛争のあおりを受けて、高校教育にはいくつかの改善のメスが加えられた。また小学校には、ゆとりの時間の導入もあって、次第に個性ある学校文化が生まれつつある。しかし中学校教育は、相もかわらぬ規則による支配に加えて、進学競争の加熱から、ますます体質を硬化させつつあるように思う。最近ひん発している校内暴力や非行は、その体質の中で、生まれるべくして生まれた、鬼っ子のひとつとも言えるかもしれない。

制服の評価

さて中学生たちは、こうした中学校の状況をどう考えているのだろうか。規則支配のひとつのシンボルとして、制服に例をとって、彼らの考えに接近してみよう。

表20は、制服について10の意見を提示し、その賛否をみた結果である。上の5つは主として制服に、ある意味で精神形成（自己コントロール）のメカニズムを期待した意見、下の5つは、実用性からの意見である。

まず全体として、女子生徒たちが予想外に、制服に肯定的であることに驚かされる。

「わりと」を含めた肯定率は（カッコ内男子）、

- 学生らしくてよい……………68%(58%)
- 統一がとれる……………65%(62%)
- 中学生の自覚ができる……………59%(54%)

● 選ばなくてよいので便利……………66%(52%)
となっており、否定する者の数をはるかにしのいでいる。とくに制服に精神形成の役割を認める傾向が、筆者らには気になって仕方がない。

多少の否定的意見としては、実用的な側面

● 活動しにくい……………71%(73%)

● 不潔……………52%(36%)

があり、他に「非行防止に役立つ」「服装のセンスを育てない」「経済性」「学校に管理されている気がする」などについては、賛否が分かれるものようである。

いずれにしろ彼女たちは、おしなべて、制服に対して肯定的であり、しかも、多くの項目において、男子よりも肯定的である。（男子は、「非行防止に役立つ」「活動しにくい」「学校に管理される」の3つの意見でのみ、やや女子より肯定率が高い）

しかし学年が進むと、表21に示したように、「自覚ができる」「非行防止」などのメカニズムを支持する者はへっている。小学校時代になかった制服へのあこがれも、学年が進むとしだいに色あせてくるのであろう。しかし、「活動しにくい」とする意見も2年生ではややへってきており、「制服に特別な意味を認めるわけではないが、着用には慣れてきている」といった状況が見いだされる。



(表20)―① 制服に関する意見 (女子)

(単位：%)

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらでも ない	あまりそう 思わない	全然そう 思わない
制服は学生らしくてよい	22.6	45.1	19.1	9.5	3.7
制服があると 学校全体として統一がとれる	25.6	39.5	16.4	13.6	4.9
制服を着ると 中学生としての自覚ができる	23.8	35.2	19.5	15.0	6.5
制服があると 非行防止に役立つ	13.0	20.0	28.1	24.7	14.2
制服があると先生や学校に管理 されているような気がする	12.0	17.4	30.0	24.8	15.8
制服は活動しにくい	37.2	33.5	15.8	10.5	3.0
何を着るか考えなくてよいので便利	29.9	36.1	13.7	13.5	6.8
あまり洗濯をしないので不潔	21.4	30.9	25.7	17.9	4.1
洋服代がかからず経済的	12.8	20.8	26.9	27.6	11.9
服装のセンスが育たない	9.3	13.7	35.0	30.0	12.0

(表20)―② 制服に関する意見 (男子)

(%)

	とてもそう思う	わりとそう思う	どちらでもない	あまりそう 思わない	全然そう 思わない
制服は学生らしくてよい	19.3	38.7	25.0	10.6	6.4
制服があると 学校全体として統一がとれる	27.1	34.1	19.7	12.9	6.2
制服を着ると 中学生としての自覚ができる	20.7	32.8	19.0	17.4	10.1
制服があると 非行防止に役立つ	17.0	23.4	23.6	21.6	14.4
制服があると先生や学校に管理 されているような気がする	18.5	16.4	28.2	22.6	14.3
制服は活動しにくい	45.4	27.2	13.2	9.1	5.1
何を着るか考えなくてよいので便利	21.6	30.0	17.9	18.5	12.0
あまり洗濯をしないので不潔	15.5	20.6	28.7	23.1	12.1
洋服代がかからず経済的	12.4	15.5	24.5	28.1	19.5
服装のセンスが育たない	9.5	10.5	39.4	25.3	15.3

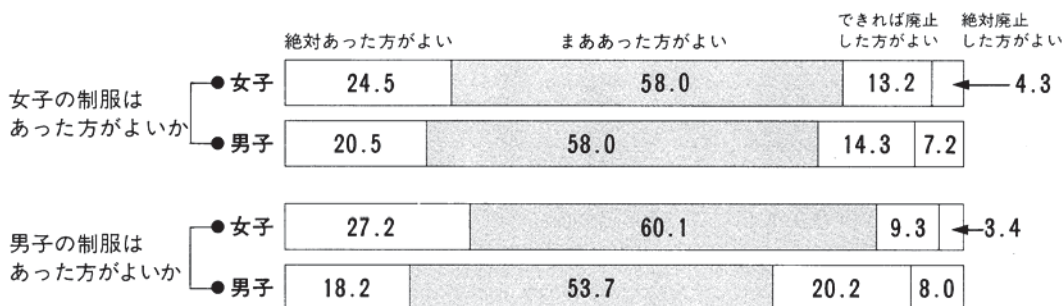
(表21) 学年×制服に関する意見 (女子)

(%)

		とても そう思う	わりと そう思う	どちらでもない	あまりそう 思わない	全然そう 思わない	
非行防止になる	1年	15.4	37.1	21.7	26.5	23.2	13.2
	2年	9.3	26.7	17.4	30.5	27.1	15.7
中学生としての 自覚ができる	1年	28.4	63.6	35.2	16.7	14.0	5.7
	2年	17.1	52.1	35.0	23.6	16.5	7.8
活動しにくい	1年	40.1	73.0	32.9	13.3	10.1	3.6
	2年	32.7	67.0	34.3	19.9	10.9	2.2

<図11> 性別×制服があった方がよいか

(%)



制服賛成派は83%

以上のような意見の総合として、制服に対する賛否を聞いたのが図11である。

図が示すように、「まあ」も含めて、**女子の制服賛成派は83%、反対派17%**と、大差がある。男子の制服についても同じく、**87%、13%**と似たような数字である。

さきに指摘したような制服に対する男子の多少ネガティブな態度は、ここでもわずかに現れていて、図11に示したように、自分たちの制服に対する賛成派は**72%、反対派28%**、

女子の制服については同じく、**79%、21%**となっている。

男子と女子とでこのように多少の差はあるものの、総じて彼らがなぜこんなにも熱心に制服を支持するのか、筆者らには理解ができないことのひとつである。決められたワクの内、自由もないかわり、ひとつの安心と保護とを約束される。そうした状態に、すでに青年期に入った生徒たちが安住していることを、この制服に対する意見は示しているのではないだろうか。そうだとすればこれは、彼らの精神の硬さとエネルギーの衰退ぶりを示しているようで、われわれには気がかりである。